

2023年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	出来事との距離ー描かれたニュース・戦争・日常			担当者名	町村悠香、川添愛奈		
会期	2023年6月3日(土)～7月17日(月・祝)			開催日数	39日		
協賛・後援・協力	なし						
巡回館	なし						
展覧会概要	当館収蔵品のなかから、ゴヤ、月岡芳年、浜田知明など時代や地域を超えてニュースや戦争をテーマにした作品約130点を展示するとともに、このテーマと響きあう制作を行う4人の若手作家を紹介し、合計150点を展示した。						
ねらい・対象	「出来事との距離」というタイトルを据えることで、ニュースや戦争を描いた作品とそれに対して画家や絵師がとったスタンスを相対化することを目指した。当館収蔵品だけでなく、若手アーティストの作品を紹介し、なかでも本展の全体テーマと通じる活動を行う松元悠を特集した。これにより現代アート関心層にも訴求する展覧会構成とし、若い世代にも当館収蔵品を知ってもらうことを試みた。						
関連催事	催事名	開催日	タイトル	講師等	参加者数		
	アーティスト・トーク	6月17日(土)	—	松元悠	41人		
	プロムナードコンサート	7月16日(日)	戦争と日常 音楽で描かれた情景	江澤隆行(ピアノ)	134人		
	ギャラリートーク	6月18日(日) 7月1日(土)	担当学芸員によるスライドトーク	担当学芸員	48人 27人		
観覧料	一般	大・高生	中学生以下	無料日			
	800 円	400 円	無料	・初日:6/3 ・シルバーデー(65歳以上無料):6/28			
	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、大・高生	内、小・中生	内、その他
	2,711 人	1,226 人	3,937 人	3,512 人	321 人	104 人	0 人
	目標値	5,946 人					
主な収入	観覧料収入		図録販売収入	受託販売収入		その他の特定財源	
	1,712 千円		— 千円	535 千円		—	
事業経費	・講師謝礼			45千円		2,195 千円	
	・原稿執筆謝礼			9千円			
	・著作権使用申請委託料			8千円			
	・通信運搬費			496千円			
	・作品額装委託料			497千円			
	・広告宣伝委託料			143千円			
	・ポスター等作成委託料			491千円			
	・ディスプレイ作成委託料			506千円			
主な広報・取材等の講評	【新聞】朝日新聞文化面、東京新聞文化面(2回掲載)、中日新聞文化面、京都新聞 【雑誌】芸術新潮 【ウェブ】Tokyo Art Beat、ウェブ美術手帖、美術展ナビほか (新聞、雑誌、ウェブは全て展覧会レビューまたは松元悠インタビュー)						

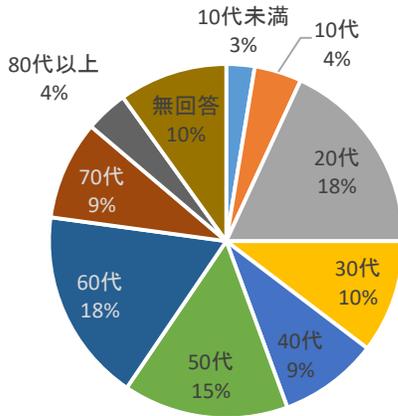
アンケート結果	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)		
	件	%	%	%	企画の内容	展示作品	展示の仕方等
	231	5.8	21	54.5	93.9	94.1	84.6
	主なご意見		別紙のとおり。				
工夫と反省点、改善方法	予備調査	2022年夏から企画を練り始めた。ゴヤの『戦争の惨禍』、浜田知明『初年兵哀歌』といった、当館でこれまで戦争がテーマの展覧会を開催した際に出品してきた名作だけでなく、新しい視点で収蔵品に光を当てられないか検討した。そこで戦争だけでなく報道も主題に加え収蔵品を出品し、若手アーティストの出品も依頼することにした。10月ごろに松元悠氏に出品を依頼し、松元作品を展示することを前提に全体の構成を検討をした。					
	作品選択	作品約150点を選定し、5章構成とした。1章から4章まではすべて当館収蔵品を紹介した。「1章 ゴヤが描いた戦争」はゴヤの『戦争の惨禍』から20点を展示。名作を最初に展示することで、展覧会の世界に引き込むことを目指した。「2章 戦地との距離」では浜田知明、『新日本百景』、畦地梅太郎、北岡文雄の作品合計約25点を展示した。浜田はゴヤの影響を受けており、1章から2章にかけては両者の作品が並びつつ、アジア太平洋戦争に関わる作品が展開していく流れとした。「3章 浮世絵と「報道」」では時代を遡り、戊辰戦争に着想を得た月岡芳年の『魁題百撰相』、錦絵新聞、西南戦争錦絵、日清戦争錦絵、浅井忠作品など約合計45点を展示した。時事問題が描けなかった江戸時代から、浮世絵が報道・戦争錦絵へと主題を広げる流れを示した。「4章 ニュースに向き合うアイロニー」では、昭和・平成期に社会的なテーマで制作した石井茂雄・郭徳俊・馬場禰男の作品約40点を展覧した。最後の「5章 若手アーティストの作品から」では、土屋未沙、小野寺唯、ソ・ジオ、松元悠の4名の作品合計約20点を紹介し、なかでも松元を特集した。松元はメディアやSNSが伝えるニュースの現場を訪れて想像を働かせ、当事者の姿を自画像で描くことで、日常と地続きにある「事件と人間の不可解さ」に分け入る活動をしている注目のアーティストであり、大学時代から現在までの作品を紹介した。なお、小野寺、ソ、松元は全国大学版画展受賞者であり、当館で収蔵している受賞作を活用した。					
	図録作成	A5二つ折りのリーフレットを作成し、無料配布した。内容は若手作家4人の略歴とステートメントを掲載した。					
	広報	ちらし・ポスターでは、松元悠氏の《蛇口泥棒》をメインビジュアルに使用した。若手アーティストの作品を起用することで、現代アート関心層にも訴求することを目指した。当館でこれまで戦争をテーマにした展覧会を行う際にはゴヤの作品をメインに据えることが多かったため、その差別化もはかった。					
	宣伝	新聞、ウェブメディアで複数の展覧会レビューが寄せられ、ウェブ美術手帖、Tokyo Art Beatで松元氏インタビューも公開されたため、展覧会後半にかけて来館者数が伸びた。特に、法廷画家の活動も行っている松元氏のアーティスト活動に注目が集まり、その視点からの取材を受けることが多かった。しかし会期が短かったため、レビューやインタビュー公開の集客効果を十分に発揮しきれなかった。アンケートでは展覧会情報の入手先が「⑦家族・知人からすすめられて」が2番目に多く、出品作家による宣伝や、来館者がSNSに感想を書いた口コミ効果が反映されたと考えられる。					
	ディスプレイ	5章の若手作家の作品展示では、それぞれの作品の個性が伝わるよう、スペースを広くとって展示した。また撮影可・不可エリアの区分けが混乱しないよう、5章の企画展示室2のみ撮影可能とした。					
	輸送・展示撤去	土屋未沙氏の作品はインスタレーション展示だったが、作家と事前の打ち合わせを行い、さらにリモートでやり取りすることで滞りなく展示することができた。					
イベント	松元悠氏は本展に合わせて漫画冊子『蛇口泥棒日記』を刊行し、ミュージアムショップで売れ行きが好調だった。冊子に関心を持つ層との相乗効果を期待し、松元氏によるアーティスト・トークでは、終了後にサイン会を実施した。						
その他特記事項							
館長からの指導点							
運営協議会での検証							

「出来事との距離-描かれたニュース・戦争・日常」展 アンケート集計結果

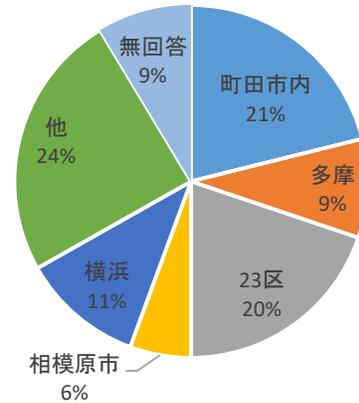
開催期間：2023年6月3日（土）～7月17日（月祝）

回答者数： 231 人（総入館者数：3,937人 アンケート回収率： 5.8%）

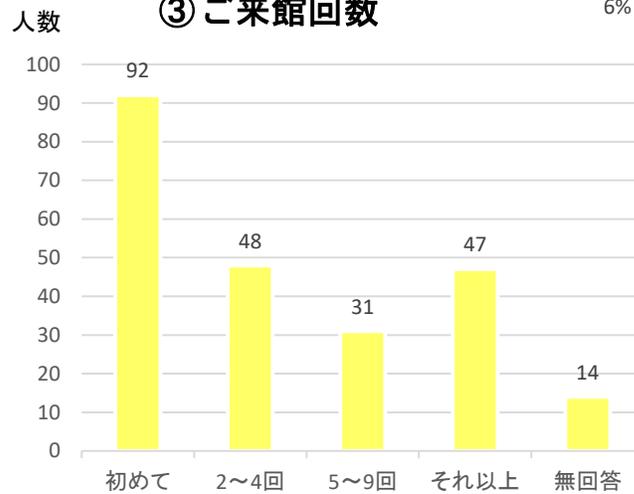
① 年齢層



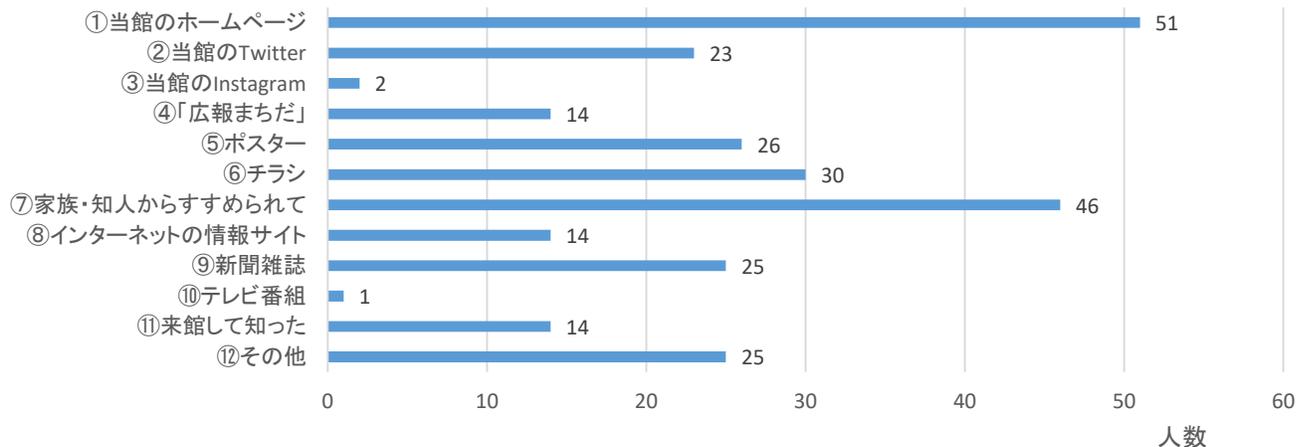
② お住まい



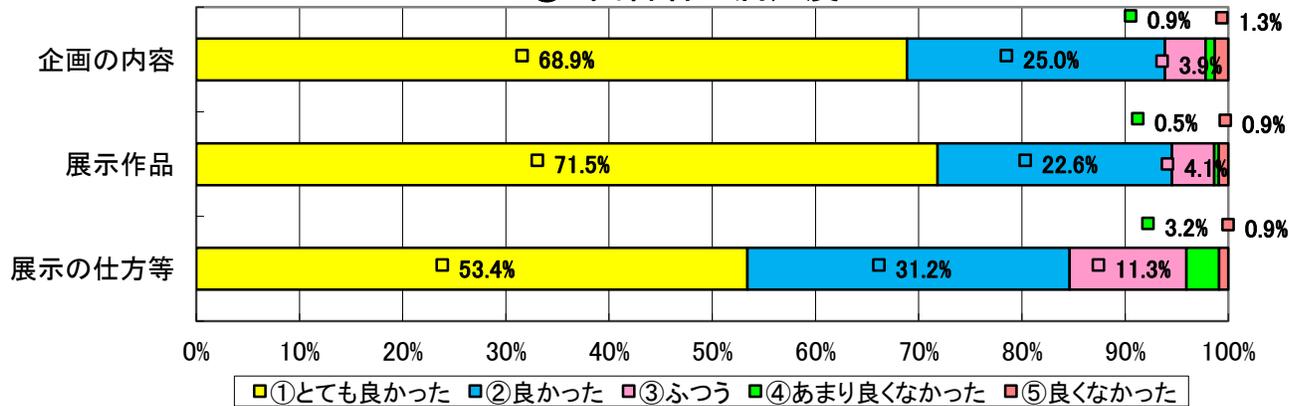
③ ご来館回数



展覧会情報の入手



⑥ 回答者の満足度



⑦ 主なご意見・感想

◆企画の内容

- ・戦争画というと太平洋戦争（以降）の作品が取りあげられることが多いが、日清、日露などでの従軍画家の作品も沢山あるのに、見ることは少なくて...そんな作品も少しでも見ることができて良かったです。楽しい企画ありがとうございました。
- ・收藏されていて、何度か拝見した作品（浜田知明など）も良かったです。若手作家の作品がとてメッセージ性があり訴えかけてくるものがありました。特に松元さんの作品をもっと見たいです。
- ・描かれたニュース、今時の若者は・・・とよく言われますが、今回の展示作品をみて70代の私は逆に気づきを教えられました。
- ・「出来事との距離」というテーマで、昔や現在、国といった視点で多くの展示を観られてよかった。値段も払うのにそんなに苦しくなかったの、行きやすかった。
- ・若い人、子供たちにこそ見てもらいたい内容でしたが、時代背景などにある程度の共通認識がないと理解できない展示だとも思いました。作品を見て、考えて語り合うような子供向けの対話型WSがあってもよかったかもしれません。
- ・戦争をはじめ、出来事の記憶をどのように残していくのかということに関心がある。
その点でアートは最もその媒体として適していると考えると同時に、いろいろな可能性を潜在的に有していると思う。いわゆるメモリースタディーズの視点からもアートの領域は重要な、中心的役割を担うと考えている。今回の企画でとりわけ面白かったのは最後の、今日の比較的若い人たちを取り上げたセクションでした。最近のソーシャリーエンゲージドアートの傾向も反映しつつ、直接的なメッセージというよりは、なかば挑発や異化のような作用をもちいて、社会的な問題・テーマやイシューを考えさせる。その姿勢はとて共感しました。ゴヤなどの古典的な名作とともにこのような作品の展示構成や企画の意図に非常に興味深い思いがいたしました。
- ・今回の企画展どおり、面白く、なおかつ貴館の独自の路線に沿った展覧会の企画を今後も継続してほしい。

◆展示作品

- ・『新日本百景』畦地梅太郎の『満州』など 植民地下の朝鮮や台湾の風景画をゴヤや芳年と並んで見ることが出来、刺激的だった。アーティストトークも参加し、なぜそのニュースを選ぶのか、出来事の当事者とそれを見る（消費する？）作家・私達との間にある境界がどのように今後揺らぎあいまいになっていくのか気がなった。自分も何らかのニュースの当事者（報じられる側）になりうるだろうと思う。
- ・ふしぎなえ、せんそうのえ、こまかいはんが、とてすごいさくひんでした。またきたいです。
せんそうのえは、せんそうのもっともざんこくさをしたし、ぎんざのえや大正6年しょうわのえもとくにすごかったです。

◆展示の仕方やキャプション、イベント

- ・ギャラリートークに参加しました。企画の意図がよくわかり、解説がきけて良かったです。もう少し作品にキャプションがあるとわかりやすいかも。
- ・錦絵に書かれた文章に興味をひかれました。しかし、細かいくずし字で読み切れず、解題があるとのお理解が深められたと思います。

◆その他、感想・要望など

- ・シャトルバスにのれた事が感謝したいと思いました。中庭まであり予想より大きな所に思いとても良い気分でした。